

神はいるか

テンロクリトラクダブル

この世に存在するすべての物事を二分するとき、我々人類に対してもっとも原始的、基本的方法は「自分と自分以外」、すなわち、認識者と被認識者である。そしてそれすらも一つのものとして包含しうる究極の方法が、「観念と自然」、すなわち、人類がいなければ存在しえないものと、人類がいなくても存在しうるもの、である。どちらにしる、「心の存在と心の外の存在」と言い換えられる。

真実性——つまり正しさを三種類に分ける。主観的事実、客観的事実、そして絶対的真実。

主観的事実は、それぞれ個人が正しいと考える事柄の真実性の範囲である。その事柄を心のすべての領域で信じること、心のどの領域でもそれを疑っていないことは信仰すること、つまり信じることであり、主観的事実の最大値である「相対的真実」に到達する。例えば、ある人が「神は

いる」ということを信仰すれば、それは紛れもない真実である。その一方で、ある人が「神はいない」ということを信仰すれば、それは確実に真実である。このように、「神はいる」と「神はいない」は両方とも真実であり、矛盾しない。何故ならそれは相対的な真実であるからだ。ここでいう「相対的」とは、主観的事実の持ち主のそれぞれが「見た世界」の相対性を指す。人々が「見た世界」を共有していないことがその相対性の前提である。その前提の根拠は、世界観の相対性である。

人はこの世界を認識するとき、不可避免的に、世界観という認識傾向のフィルターを、自分（認識者）と自分以外（被認識者）の間に置く。世界観は、具体的には、名称、宗教、常識、偏見、経験などの認識傾向によって構成される。世界観は誰とも完全共有しえない相対的なものである。人によって世界観は異なるので、「見た世界」も相対的である。眠たいとき、レム睡眠時、寝ているとき等、意識が薄い状態の人間は世界観に強く思考を侵食される。そのような時、人は夢を見る。特に、幼い子供、寝不足である者、精神病を患っている者等の無意識的な人間は、起きながらに

して夢を見ることが多い。世界観というフィルター思考への影響力が大きくなりすぎると、世界観はその人にとつての相対的眞実となる。その世界観というフィルターに神が刻まれているのならば、神はその世界観を持つ人にとつての相対的眞実として限定的に存在する。信仰することも同様で、ある事柄を信仰することでそれが認識傾向として世界観に深く刻まれ、強い影響力を持ち、結果その事柄が当人の相対的眞実となるのだ。

結局、神は相対的眞実として人の心の内に存在しうる。

客観的事実とは、全人類が辿り着きうる眞実性の範囲、つまり人類の可知領域である。

人類の最初の一人から最後の一人までの全員が正しいと考える事柄があるとして、それが客観的事実の最大値である。

客観的事実の最大値とは私の仮説上の仮想概念であるが、これと一致する別の仮想概念が、ユングが提唱した集合無意識の原型である。

人の心を海に例える。自我はその上に位置する太陽であ

る。自我の放つ光は認識のメタファーである。自我の光が届きえない深海を無意識と呼び、その中の最深处が集合無意識である。この集合無意識は全人類に対して普遍的であり、そこに潜むのが原型という認識傾向群である。その中に人に神の存在を感じさせる性質のものがあるとすれば、人にとって神とは普遍的存在となるのではなからうか。

何故空から雨が降るのか、何故風が吹くのか、何故自然災害は起きるのか。誰もその正しい原因を知らなかった時代があった。その時代の人には知識がなかったが、なかったなりにそのような森羅万象の原因を空想した。そして、人が起こしたものととは考えられないような自然現象が起きる原因として、人類の能力を超越した存在を信じざるを得なかった。そして自分たちよりはるかに強力な力を持つ彼らに対して、畏敬の念を持たざるを得なかった。これらは全て、人類の心の中に原型として「自分より上位な存在を畏敬する」認識傾向が備わっていたから、と言えるであろう。裏返せば、人類に恐怖、尊敬という感情がなかったら、人がこの世界に神を見出すことはなかったのだといえる。

恐怖や尊敬という感情は全人類に普遍的な本能である。

それは神という観念が存在するために不可欠な原因であり、つまり神という存在の本質である。しかし、だからといって、神の存在自体までが普遍的であるとまでは言えない。

神の不在もまた、相対的真実としてありうるからである。

結局、神という存在の本質は人の本能として普遍的であるが、神の存在自体は相対的であることに変わりない。

人類には高度な知る能力があるが、それには限界がある。人類によるこの世界の認識は、有限のチャンネルによってなされる。五感というたった5チャンネルで、この世界のすべてを知ることができるであろうか。思考能力も知る能力の一つであるが、人類は思考による不条理、誤謬をなしうる。つまり、人類の知る能力は有限であり、しかも可謬性があり、たどり着きうる真実性の範囲も有限である。この世界の絶対的に正しい姿を知ることにはできない。裏返せば、人類の知る能力のたどり着けない領域には、絶対的に正しいこの世界の姿があるのである。人知を超越した不可知領域にある、無限の真実性を持つ世界の姿、それを絶対的真実と呼ぶことにする。

主観的事実と客観的事実は観念であるが、絶対的真実は自然である。もし、「人類が存在しない世界にも神が存在する」、ということを知ることができれば、「神はいる」という記述は絶対的真実であるということを知ることが出来る。しかしそれは永久に不可能である。前述してある通り、人類にとって絶対的真実は不可知であるからだ。

それに、『神はいる』という記述は絶対的真実であるということを知ることができ』たとしても、それが人類の主観的認識、つまり観念である以上、可謬性が付きまとう。そしてなにより、「言語」などという人類が勝手に作った創作物で、絶対的真実をそのまま表すことはできない。仮に絶対的真実のままの姿にたどり着いた哲学者がいたとしても、例えばそれを本に書いて出版したり、友人に話したり等の言語によって表す試みをした時点で、それは観念という可謬性を持ったものになる。

結局、人の心の外に、人が神と呼ぶそれが存在するかしないかは、永久に不可知である。